

# 中国長笛物語

てんでいえん

田呈媛 博士学位申請リサイタル

フルート: 田呈媛(D6)

ピアノ: 河合珠江(卒)

指揮: 仙崎和男(客演)

共演: 京芸有志オーケストラ

フルート: 吉延佑里子(4) 青木淺間(4)

オーボエ: 葛城裕也(2) 榎本優作(2)

クラリネット: 平川奈津美(M1) 辻さゆり(2)

ファゴット: 高島翔大(4) 陶山咲希(1)

ホルン: 木村夏音(4) 齊藤日菜子(2)

トランペット: 尾田莉子(2)

ティンパニ: 岩野牧人(4)

ヴァイオリン: 江川菜緒(M1) 今西彩菜(卒) 西尾安梨沙(M1) 柳原史佳(3)

柳樂毬乃(4) 原田詩穂(4) 河村真央(4) 大堀綾矢子(4)

吾藤早桜(3) 早瀬千賀(4)

ヴィオラ: 眞岩絃子(2) 田中希(2) 小椋小野花(3)

チェロ: 玉木俊太(卒) 村田静菜(2) 西村なまみ(4) 谷口晃基(卒)

コントラバス: 大加戸まゆ(4) 池田尚輝(3)

日時: 2016年12月14日(水) 18:30 開場 19:00 開演

会場: 京都市立芸術大学講堂

## 中国長笛物語

19世紀半ば、東洋に辿りついた西洋人はおそらく自国の文化を伝播する意識を持たず、自らの需要に応じて、東洋での生活を自国と同様にするため、西洋音楽を運び込んで来た。一方、鎖国時代のアジア諸国の知識人は、黒船来航によって西洋と東洋が正面から衝突することで新たな世界観に目覚めた。彼らは自国の進歩と革新を志し、西洋の文化、制度、軍事などを旧体制に応用し、西洋音楽もその時に導入し始めた。

私の京都市立芸術大学大学院博士課程における論文研究課題は『中国における西洋音楽受容と西洋音楽職人——北京と東北地方の吹長笛人』である。この研究は19世紀半ば西洋音楽が導入されはじめた頃、中国に現れたフルート吹き(吹長笛人)に焦点を置いたものである。

19世紀半ばから20世紀にかけて、中国人の西洋音楽に対する態度は二つに分かれた。一つは、西洋音楽を積極的に導入しようとするもの、もう一つは西洋音楽の受容に消極的、もしくは受動的というものであった。この時期に西洋音楽に携わった中国人の多くは、西洋楽器を自らの意志によって選び取ったわけではなく、むしろ受動的受容ともいべき態度で消極的にそれらに触れ、あるいは与えられたものとして演奏法を習得したと考えられる。西洋音楽を芸術として深めるというよりも技術として認識し、必要に迫られてそれを身につける、というものであった。

芸術的志からではなく、生活の糧のために西洋楽器を演奏した彼らこそが私の研究対象となる「吹長笛人」である。彼らは決して中国における西洋音楽受容史に書かれるほどの人物ではなく、顕著な業績を持つわけでもなかった。ある需要をうけ、楽器に触れるようになり、生きる手段として、フルートを吹く技術を身につけ、吹き続けていた。表舞台で書かれる「有名」である人物と比べ、「無名」の存在である彼らは、裏舞台で西洋音楽受容の担い手であり、激動の時代の「中国長笛物語」を作り上げた。



## ～プログラム～

### 1. 黄安倫(1949-) : 舞詩(1981)

Huang Anlun : Poem for dancers

### 2. テルシャック(1832-1901) : コンサート アレグロ

Terschak, Adolf : Allegro de Concert Op.147

### 3. 江文也(1910-1983) : 祭典奏鳴曲(1937)

Koh Bunya : Sonata Festosa Op.17

- i Allegro animato con festoso いきいきと、祭りのようなアレグロ
- ii Lento amoroso 緩やか、愛情を満ちて
- iii Prestissimo gaio 陽気で活発に、急速なテンポで

### 4. ヒンデミット(1895-1963) : フルートソナタ(1936)

Hindemith, Paul : Flute Sonata

- i Heter bewegt 快活で動いて
- ii Sehr langsam 非常に遅く
- iii Sehr lebhaft 非常に活発に

休憩(15分)

### 5. イベール(1890-1962) : フルートコンチェルト(1934)

Ibert, Jacques : Flute Concerto

- i Allegro アレグロ
- ii Andante アンダンテ
- iii Allegro scherzando アレグロ・スケルツァンド

黄安倫(1949-)：舞詩(1981)

Huang Anlun : Poem for dancers

黄安倫は、中華人民共和国が成立した年の1949年に北京で生まれた。1961年中央音楽学院付属中学校にピアノと作曲専攻として入学し、卒業後の1968年に軍部農場の労働改造に参加した。その時の経験は彼の音楽風格にとって大きな影響を与えたという。彼は1989年にカナダのトロントに向かった。現在カナダに在住している。

1981年に発表された黄安倫による《舞詩》はフルート、ピアノと二人の踊り手のための作品である。この作品はそれまでの中国で作曲されたフルート曲とは大きく異なる点がある。それまでの中国で書かれたフルートのための曲は旋律に五音音階が多用され、中国の伝統楽器である竹笛のイメージを喚起する傾向が強みられる。しかし、黄の《舞詩》では中国民俗的な旋律と音階を使ったうえに、頻繁に半音ずつ転調が行われ、それまでのフルートに付与された竹笛のイメージから離れた作品であるといえる。それは例えば、使用される音域がC4から3オクターブ上のC7に至る広さを持つこと、そして半音階が使用されることからわかる(いずれも伝統的な竹笛では行われなかつたか不可能であるため)。この作品は1985年に北京で行われたフルート・コンクールの課題曲に選ばれ、現在では演奏会のレパートリーとして定着している。

テルシャック(1832-1901)：コンサート アレグロ

Terschak, Adolf : Allegro de Concert Op.147

テルシャックは、オーストリア＝ハンガリー帝国(1867-1918)出身のフルーティストである。奥国音楽博士でもある彼は日本では御前演奏も行った。彼は独奏者として、ドイツ、スイス、フランス、イギリス、北欧、ロシア、日本や中国までにも足跡を残し、ポーランドのプロツラフで客死した。彼はフルートのためのソロ、室内楽、協奏曲、教則本を作り、当時は200冊以上も出版されていた。19世紀後半および20世紀前半のフルート奏者に、彼の作品はよく演奏された。そして彼自身の演奏ツアーでは自らの作品と取り上げることが多く、記録によれば、この《コンサート アレグロ》は「軍事上の物語を曲に製したものであり」、1890年に彼が日本に滞在した時に2回も取り上げた。おそらくこの曲は彼のお気に入りだったであろう。現時点の資料では、彼の中国での演奏については詳しく記録されていないままだが、中国でも同じ内容の演奏を行ったかとも考えられる。

江文也(1910-1983)：祭典奏鳴曲(1936)

Koh Bunya : Sonata Festosa Op.17

江文也は植民地として日本に支配された台湾に生まれ、13歳のとき日本の長野県上田中学に入学、6年後東京武蔵野高等工業学校で電気工業を専攻した。同時に上野音楽学校(現在の東京藝術大学音楽学部)で声楽を学んだ。音楽に極めて熱意があったため、音楽の専攻に転向した。山田耕筰の教え子として作曲を学んでいた。日本にいる1938年までには、多く作品が賞を取り、彼にとっては一番活躍していた時期であった。中国に戻り、北京師範大学音楽系作曲の教授として勤めた。1945年日本の投降によって、彼は日本に居ることができなくなり、日本に住む家族と離ればなれとなった。1949年以降中央音楽学院の教授として務めていたが、戦争期間に彼は親日的な作品が書いたため、1966年から右派と判定され、17年間批判された。1983年右派の烙印が取り消されたが、体が悪くなり、創作できないまま世を去っていた。

《祭典奏鳴曲》は、江文也の人生に一番輝いていた時期の作品である。当時彼は世界中に活躍しており、さまざまな賞を取得し、その中、彼の《台湾舞曲》は1936年ドイツベルリンで行われたオリンピック運動会で管弦楽組特別賞を得た。《祭典》は中国人作曲家による最初のフルートとピアノのために書かれたものがある。しかし、中国ではこの作品があまり知られていなかった。知られたのは近年江文也についての研究が盛んになってきたためだろう。

第1楽章は「いきいきと、祭りのようなアレグロ」、第1主題で大鼓のリズムで踊る気分を誘う、第2主題ではシンコペーションが刻む緩やかな旋律で抒情。第2楽章は「緩やか、愛情を満ちて」、フルートとピアノが山奥の掛け声のように問いかけ、答える。第3楽章は「陽気で活発に、急速なテンポ」、伝統の作曲手法の枠を超え、予想外のフレーズを3拍子のなかに4連符で織り込み、舞踊場面を作り上げる。

#### ヒンデミット(1895-1963): フルード ソナタ(1936)

Hindemith, Paul : Flute Sonata

ヒンデミットはドイツのハーナウに生まれた。11歳にフランクフルトのホッホ音楽院でヴァイオリンと作曲を学んだ。第一次世界大戦に従軍、退軍した後、弦楽四重奏団のヴィオラ奏者として活躍していた。彼はまた指揮者でありながら、ピアノ、クラリネット、ファゴットなどの楽器を弾きこなす多才な人物である。

彼は代表作のオペラである《画家マティス》(1934-1935)を作曲した。しかし、この代表作である作品はヒンデミットがドイツ人でありながら、ナチスの意に沿うものではなかったため、「退廃音楽」との烙印を押され、弾圧を受け、1938年にスイスへ亡命、さらに1940年にはアメリカに亡命した。第二次世界大戦終結後、1953年によくヨーロッパへ帰還した。

この《フルードソナタ》が作られた1936年頃から晩年にかけて、ヒンデミットはオーケストラに含まれるすべての楽器のためにピアノ伴奏付きのソナタを作曲した。この作品は、江文也の《祭典奏鳴曲》と同じ年に書かれ、彼と同じく戦争に翻弄される人生を送ったため、ここではアジアとヨーロッパの比較として取り上げることにした。

#### イベール(1890-1962): フルード コンチェルト(1934)

Ibert, Jacques : Flute Concerto

イベールはヒンデミットと同世代の作曲家である。彼はフランスのパリで生まれた都市子である。1910年パリ音楽院に入学し、作曲を学び、第1次世界大戦に海軍に従軍した後、ローマ大賞を受賞し、ローマへ留学した。代表作の《寄港地》(1922)は彼のローマで留学した間、海軍時代の印象から構想を練って作曲したものである。

《フルードコンチェルト》は《寄港地》と並び、彼の代表作としてよく知られている。さらに、このコンチェルトは20世紀最も有名なフルードコンチェルトであり、イベールが1932年から1933年にかけてフルードと管弦楽のために作曲した。このコンチェルトの初演は20世紀フルード名匠であるマルセル・モイーズ(1889-1985)のフルードで、フィリップ・ゴーベール(1879-1941)の指揮、パリ音楽院管弦楽団によって1934年に行われた。

この曲は、中国では1961年に、私の恩師である于継学(1932-)のフルードで、黄曉同(1933-)の指揮、上海音楽学院交響楽団との共演によって上海コンサートホールで初演された。中国ではフルードがソロ楽器として管弦楽と共演することはそれが初めてであった。この初演によって、フルードは交響楽団の一部として必要とされるだけでなく、ソロ楽器として中国の音楽舞台に活躍しはじめた。



私は2006年9月に日本留学の旅へ、あっという間に10年もたちました。ここまで巡りつき、助けてくださり、チャンスを与えてくださった方々に感謝の気持ちで胸にいっぱいです。

このリサイタルは、おそらく私の日本での留学生時代の開幕としてかざられるようになります。しかし、私の人生で語る「長笛物語」はまだ終止符が打たれることはありません。これからも、この10年間で学んだ、感じたことを生かし、「無名」でありながら、流されないう、頑張っていきたいと思います。

田呈媛

2016年12月14日